

大恋愛をお約束します!?

目次

大恋愛をお約束します!?

5

ひみつの隠れ家にご一緒します!?

243

大恋愛をお約束します!?

屋下がりのオフィスビル、十五階フロア。

細く開けた窓から吹き込む心地よい涼風に頬をくすぐられていると、知らないうちにまぶたが重くなる。

——いやいや、今は工作中。そんなことを言っている場合じゃない。

お客様と向かい合って座るソファの、相手から死角になつてるテーブルの下で、私は自分のふくらはぎの裏を軽くつねって気合いを入れた。

そして、目の前のお客様へと視線をしっかりと合わせる。ただ今、面談中なのはケバケバの化粧おぼけ……もとい、元の顔が想像できないほどぼつちりメイクの若い女性。

彼女は昨夜お見合いしたばかりの相手の男性とのことを、ダラダラ、いえ、とても詳細に話し続けている。

「……んもう、写真より五歳は老けて見えたしー。正直、あれで課長になれたなんて信じられない。どうせ部下から全然信頼されてないでしょって感じーっ」

鼻にかかった声でけだるそうに報告してくれているのは、作倉モモコさん、二十八歳。最初はどこ

このキャバクラ嬢が迷い込んできたのかとびびつたけど、この方は真正正銘、当結婚相談所の正規会員だ。

頬にかかる嫌みなくらしい気合いの入った巻き髪、実際の二倍は大きく見せているであろう目。ここまで接近するうちよつと怖いかも。

心の中でそう呟きつつも、私は神妙な面持ちで頷きながら、所定の聞き取り用紙に要点を書き込んでいく。途中で何度も口を挟みたくなるけど我慢我慢。気が済むまで言いたいことを話してもらうのも、私に課せられた大切な業務のひとつだ。

「話だつて弾まないしーっ、退屈すぎて死んじやいそうだった。挙げ句に、あれは何？ 食事代は原則として割り勘って聞いてはいたけど、まさか一円単位で折半させられるなんてあり得ない。あんな奴、百年かかったって相手決まらないから。あーっ、だからーアタシが言いたいの……」

そこで軽快な着信音が鳴り出す。

もちろん、目の前の彼女は当然のように通話ボタンをプッシュ。

「あ、サヤカ!? うん、元気イ〜? そうそ、聞いてよ聞いてエ〜……」

……ええと、お客様。よろしいでしょうか?

そのまま、面談中だったことなんて、まるつきり忘れちゃったみたいに電話に没頭している。たった今、私に話してくれた内容にさらに大幅な脚色を加えている辺りがすごい。

——ま、いいか。話はだいたいつかめたし。

私は口元に浮かべた営業スマイルをそのままに保ちながら、テーブルの上の資料を片付け始める。

そして空っぽになったカップを交換するために席を立とうとした時、くるくる巻き髪さんの電話が終わった。

「うふ、これから予定がでちゃいました。そんなわけで、今日はこの辺で。じゃあ、失礼しまーす！」
それだけ言うと、彼女はお財布も入らないんじゃないかと心配になるくらい小さなブランドバッグを手にして立ち上がる。キラキラ虹色に輝く爪には、さらにラメやストーンがてんこ盛り。スカートは下着が見えそうなくらい短くつてレーシー。ここまで完璧にされちゃうと、突っ込みどころがない感じだ。

「はい、では次回のご来店をお待ちしております。本日はお疲れ様でした」

ドアの外までお見送りして、こちらも任務終了。彼女がエレベーターのドアの向こうに消えた瞬間、はあっと大きな溜息ためいきが出た。

宮内麻衣みやうちまゐ、二十四歳、独身。結婚相談所「ローズマリー」ひがし東京支店のお客様アドバイザー。と、言ってもまだ駆け出しもしいところだけど。

新卒で入った会社が、わずか二年後には同系列の会社に吸収合併されちゃって、その際の大量リストラで見事はね出されてしまった。なかなか再就職の口も見つからず途方に暮れていたところ、この支店長をしている叔母さんが拾ってくれたんだよね。それがひと月ほど前のこと。

とにかく仕事内容がどうか言ってもらえる状況じゃなかった。田舎に戻らずに東京でひとり暮らしを続けるためには、先立つものがどうしても必要だったから。だから叔母さんの誘いにふたつ返

事で飛びついてた。

すぐに本店研修に行かされて、仕事を一から叩き込まれた。そして、めでたくここに配属されたのがわずか一週間前なの。夏の初めからの約三ヶ月で、本当にめまぐるしすぎるほど環境が変化したわ。

「……ま、いいか。この辺で一息入れようっ」と

フロアに誰もいないのいいことに、私は両手を高く上げて伸びをした。

相手の話にただ相づちを打っているだけで、どうしてこんなに疲れるんだろう。叔母さんの言葉を借りれば「まだまだ修行が足りない」ってことになるのかな。そりゃあね、この道二十数年のベテランと比べられても困るって。

それに、叔母さんにはさらにはほかの人にはない特別な「能力」がある。比類なき洞察力——生涯のパートナーを求める人をひとめ見たとたん、その人にぴったりの相手のイメージがパパーッと閃ひらめくんだって。

そんなの絶対にあり得ないって思う？ ところが驚くなかれ、今まで叔母さんが誕生させた何百組もの幸せなカップルが、そのことをはっきり証明してくれているわ。

——まあ血の繋がった姪っ子だからって理由だけで、私がある特殊能力を受け継いでいるはずもないんだけど。

それどころか、未だにこの仕事のどこにやり甲斐を見いだしたらいいのか、悩み続けるばかりの毎日よ。ひとり面談しただけでこの疲労感、本当にこの先やっていけるのかしら。パソコン画面

を眺みつけながら黙々とデータ解析していた前の職場の方が、よっぽど性に合ってたと思う。

私は受付カウンターの奥にあるコーナーで、いそいそとマイカップを取り出す。えーい、いつものコーヒーメーカーじゃなくて、秘蔵のエスプレッソマシーンを使っちゃえ。

専用のカートリッジをセットすると、すぐに辺りに漂い出す香り。何とも言えない芳しさにうっとりしながら、私は店内をぐるりと見渡した。

オフィスビルの一角に店舗を構えるここは、叔母さんの「お城」。恵まれた立地条件が功を奏して、こんな風に平日の昼間でも暇を持てあまさない程度にお客様にご来店いただけてる。

いかにもそれっぽい外装じゃないのでもいいみたいで、全面ガラス張りで見える雰囲気はパッと見はエステサロンを連想させる。この支店は際だって女性会員が多いというのも頷けるわ。地上十五階から見下ろす都心の風景も最高だし、テーブルや棚にはグリーンや花がさりげなく置かれていてリラクゼーション効果もありそう。

気軽に足を運んでもらうことが一番大切なものね、そういうところもよく計算されてるなあと思う。

小さな店舗だからと、忙しい時間帯だけ他店から応援を頼む程度で、今までずっと基本的には叔母さんひとりだけで切り盛りしてたって話。それを最初に聞かされた時は、本当に驚いた。正社員として私を雇う話がふたつ返事で上からOKされたのも当然よ。

とにかく、今日も五時までは私がひとりで頑張らなくちゃならない。この先も一時間おきに三件の予約が入っている。うー、大変っ！

え、肝心のその叔母さんはどこに行っちゃったかって？

実はこの店舗の支店長である彼女は、一昨日から二泊三日のグルメツアーに出かけている。私が一通りの仕事を覚えたから、この辺で命の洗濯をしたいとか言って、自分ひとりだけさっさと年休を取ってしまった。

まあね、このところ数ヶ月は忙しすぎて一日の休みもなく頑張ってたっていうから、ちよつとはご褒美あげなくちゃかな。姪っ子を頼りにしてくれてると思えば、少し嬉しくもある。

けどなー、何度かこつちからメールで仕事の報告をしても返信はまったくなし。思いあまつて電話してもいつも圏外。いくら暇な平日の日中って言っても、新人の私ひとりでは対処しきれないことだって十分起こり得るのに。ま、こんな不安な気持ちで過ごすのも残すところあと半日だと思えば、どうにか乗り越えられるかな。

そう思いつつ、淹れたてのエスプレッソを手に定位位置の受付カウンターに戻ると、タイミングよく携帯が鳴り出した。ディスプレイには叔母さんのフルネーム「前田亜希子」という名前が表示されている。

「あーっ、叔母さん！ もうっ、何度連絡したと思ってるの！」

私が噛みつくように言うと、叔母さんはいつも通りの能天気さでカラカラと笑う。

『あらあ、麻衣ちゃん！ そんなに怒ると顔のシワが増えるわよー。いつもスマイル、スマイル。それが若さを保つ秘訣だって言ってるでしょ』

開口一番コレだもんな、もう参っちゃう。

『どう、そっちは上手くやってる？ 私？ ええ、もう絶好調！ こんなにハッピーでいいのかしらって、ずーっと思ってるわ』

元氣いっぱい声を遮かざって、私は先ほどのお客様についての報告を。本来は叔母さんが担当する会員さんだもの、きちんと説明しておかなくちゃ。

「……というわけでした。いいんだけどね、その前に先方からも断りの連絡が来てたし。うん、もちろんそのことは女性側にはお伝えしてないわ。大丈夫よ、私だってそれくらいはわかってるって」報告とか言って、本当はただ愚痴を吐き出したかっただけなのかも。それくらいのこととは、電話の向こうの叔母さんも十分わかっているみたい。

『そう、ならいいけど。麻衣ちゃんはずぐ顔に出るから心配だわー。もちろん多少のことなら私があとからフォローすることも可能だけど、くれぐれも慎重にね』

言ってくれるなあー、でも当たってるから仕方ないね。今回も途中で何度かプチッとキレそうになつたし。

「はい、わかってますって。気をつけます」

実は、会員さんとさっきのように個人面談をするのも、まだ両手で数えられるくらい。相手は大切なお客様だから、とにかく我慢我慢で話を最後まで聞かなくちゃっていうのはわかかっていても、毎回すごいストレス。先ほどの方も、こっちの怒りの警戒水位を超える前に切り上げてくれて、本当に助かった。

とにかく場数を踏むしかないんだろうな、最初から完璧にできる人なんていないんだから。まず

は上手にやろうなんて思わないで、基本をしつかり押さえていきたい。

『頼んだわよ、麻衣ちゃんだけが頼りなんだから』

そこで、電話越しに誰かが叔母さんのことを呼ぶ声が聞こえてきた。それに「はあい」と返事をしたあとで、叔母さんの声がさらに一オクターブ跳ね上がる。

『と・こ・ろ・で・っつ、実はね、今日は麻衣ちゃんにびっくりなお知らせがあるの！』

その時、何かすごい悪い予感がしたのよね。いつもはそんなに鋭い方じゃないんだけど、その瞬間だけ「野生の勘」が働いたって感じ？

叔母さんは携帯の向こう側で一度大きく深呼吸をすると、声も高らかに言い放った。

『あのねっ、私とうとう運命の彼に出会っちゃったの！ だから、これからふたりでハネムーンに出かけてきまーす！ あとのことは佐藤チーフに頼んでおくから、麻衣ちゃんも彼女と一緒に頑張っつてね。じゃ、そろそろ搭乗手続きが始まるから切るわ、また連絡するわね！』

「え？ ……ちよ、ちよつと待って！ 叔母さんっ、叔母さん——!?!」

言いたいことだけ言って、さっさと切れた電話。私は携帯を握りしめたまま、しばらく呆然ぼてんとその場に立ち尽くしていた。

——これって、どういうこと？ まさか、手の込んだ冗談とかじゃないよね。

数分後、ようやく頭が回転するようになって、私は初めて自分が今どんなに大変な状況に置かれているかを悟った。

そもそもこの支店は、叔母さんの力で成り立っているようなもの。雑居ビルのテナントのひとつ、ごく小さな店舗ではあるけれど、これだけの会員を抱えて繁盛しているのは、彼女の神業のお陰。それは研修中にも嫌と言うほど思い知っていた。

それなのに、大切な仕事を放り出して、ハ、ハネムーンなんて……。そんなのって絶対にあり得ないから……！

改めてその事実気づいた時、マジで身体中から血の気が引いたわ。叔母さんがいなくて、この支店はこの先大丈夫？ また働き口がなくなつて職探しなんてやだ。ようやく再就職できたとホツとしてたんだから、それだけは勘弁して……！

落ち着け落ち着けと自分に何度も言い聞かせながら、座り心地のいい椅子に腰を下ろす。そしてまだ湯気の立っているエスプレッソに口をつけたけど、何の味も感じなくなつた。あー、ホントにどうなつちやうの。

やーっ、完全に混乱してる。どうしよう、本当にこの先どうしようっ……！

しかし、そんな物思いも、それほど長くは続かなかつた。

ガラス張りのドアの向こうにふつと人影が見えて、私は慌てて姿勢を正す。

「いらつしやいませ！」

自動ドアが開いた瞬間に、私は反射的に立ち上がつて頭を下げた。明るく、そして上品に。挨拶の基本はきちんとできたと信じたい。

そうよ、いくら気が動転してたつてね、それくらいは社会人として当然のことだから。ああ、そ

うよ。まずは目の前の仕事を着実にこなさなくちゃ。

「え……ええと、こんにちは」

顔を上げると、辺りをきよるきよると見渡している男性がいた。年齢は二十代後半から三十代前半？ 身長は高くてすらつとしていて、でも貧弱じゃなくほどよく鍛え上げられている感じ。……しかもつ、かなり格好いい……！ 涼しげな目元も、揺るぎない自信を感じさせる口元も、最高に決まつてるわ。

やだーっ、ほんの数秒の間にいるんなことをチェックしちゃうなんて、これって職業病かな。どうも次に予約されている方とは別人のようだ。

だから、確信をもつてにこやかに訊ねてみる。

「初めてのご来店でしょうか？」

新規の方がお見えになるのは私がここをひとりで任されてからは初めてのことだ。でも叔母さんが対応しているのを隣で見えていたから、一通りのやり方はわかっている。

彼がおおずとおと頷くのを見て、私はとびきりの笑顔で記入用紙を差し出した。

「どうぞおかけ下さい。まずはこちらの用紙に必要事項のご記入をお願いします」

その言葉に、彼は怪訝な表情になつてあどすさり。

「え……でも、自分は」

あ、わかる。そうだよね、こういう場所つてどうしても緊張するもの。だから接客は努めて明るく、お客様の不安を取り払つてあげなくちゃ。

そうよ、叔母さんがいつ帰ってくるのかわからない今、新規の会員さんは喉から手が出るほど欲しい。しかも見た目も限りなく優良物件、逃す手はないでしょう。

「当店では正式にご入会いただく前に、一定のお試し期間を設けております。本日こちらにご記入されましても、即手続きに入るといことはございませんで、どうぞご安心下さいませ。今回いただくデータを登録会員様のものと照合して、お客様にぴったりのお相手を選び出すまでのプロセスをご紹介します。その上でご入会に関するご質問やご不明な点にもお答えして参りますので、何なりとお申し付け下さいませ。そこまでが、すべて無料のカウンセリングとなります」

お、囁まずにマニュアルどおりの台詞を言い終えることができた。よしよし、ここまでは上出来。お客様が首を捻りながらも席について、ペンを手にしたのを確認してから、私はコーヒーを淹れるために席を外す。

——ふうん、あんな素敵な人が結婚相談所に来たりするんだな。

コーヒーメーカーをセットしたあとで、真剣な横顔をこっそり盗み見してしまう。

あのルックスなら、どう考えても社内ではモテモテ間違いなし。同じフロアの女性社員があつという間に群がってきそう。誰もが夢見るような出会いをすぐに手に入れられそうな人が、どうしてこんな打算的なやり方を選ぶかな。ちよつとがっかり。

そこで思わず落胆の溜息をつきそうになって——慌てて口元を片手で覆ったわ。

……うん、そうなの。叔母さんには申し訳ないけど、私自身はこういう形での出会いが好きじゃない。人それぞれ価値観があるし、他人のそれを否定するつもりはないわ。でも少なくとも私は、

運命の出会いを自力でゲットしたいと思ってるんだ。

そりゃあね、ある日突然、白馬に乗った王子様が目の前に現れるとか夢物語を信じてるわけじゃない。でも最初から身長とか年収とかその他もろもろの条件をつけてターゲットを絞ってしまうって、ちよつと違う気がする。

もしかしたらコンピュータが希望条件に合わないからとふるい落としてしまった中に、本当の運命の相手がいたかも知れないんだよ。それって、すぐもつたないじゃない？

——ま、いいか。私の個人的な考えをほかの人にまで押しつける必要なんてどこにもないんだもの。せっかく鴨が葱を背負ってきてくれたんだから、このチャンスを利用しては駄目。

「どうぞ、カップが熱くなつておりますのでお気をつけ下さいませ。お砂糖とミルクはこちらです」彼はすぐにこちらを振り向いて「ありがとう」と笑顔で応えてくれた。

うーん、この表情も素敵だわ。やっぱりこんなのもつたないーとかまだ考えていたりして、もしかして私ってしつこすぎ？

「……ええと、ちよつとよろしいでしょうか」

やわらかな微笑みが自分に向けられると、胸をぎゅっと掴まれた気分になる。思わずクラクラ／＼ツときそうになって、次の瞬間にハツと我に返った。

やだな、いつもはこんなに惚れっぽくないはずなのに。今日の私、どうかしてる。

「こちらの『年収』の欄ですが、正確な数字が必要ですか？」

空欄にしてあった箇所を指さして、彼が言う。すぐに質問に答えなくてはならないのに、綺麗な

指先についつい見とれてしまっていた。

「あ、今回はだいたいで構いません。隣にチェック欄がありますから、これくらいかなと思われるところに印をつけていただければ」

その時に見ちゃったんだ、彼が迷いもなく一番下の「千五百万以上」の欄にチェックを入れているの。ふうん、やっぱりお金持ちなんだ。だよなあ、触り心地のよさそうなスーツとかピカピカに磨き込まれた革靴とか、見るからに高級そう。腕時計だって、当然ながら某有名海外ブランドのそれだ。

それからまたしばらくの間、沈黙の時間が流れていく。次の予約の方の資料を揃えながらも、彼の方が気がなって何度も何度も振り向いてしまう。

もうっ、駄目だなあ、私。ぼっち好みタイプではあるけれど、これじゃ公私混同もいいとこだわ。「今日は、こちらのオーナーがお見えになりませぬね」

記入用紙の八割方を埋め終えたところで、彼は再び顔を上げた。

「はい、あいにく支店長の前田は本日年休を取っております。……何かお言付けがございませるか？」
「そこまで言いかけて、急に不安になってきた。」

今までずっと新規のお客様だとばかり思っていたけど、この方って叔母さんの知り合い!? いや、違うよね。全然そうじゃないって、そう言っつて!

「いえ、言付けといたしますか……先日、こちらの自動ドアの件でご連絡をいただいたので、確認に来たのですが。その話はあなたでもわかりますか？」

彼の顔を見つめたまま、固まってしまった私。

ちよ、ちよっと待ってっ!? やっぱり、この人ってお客様じゃなくて――

「ご挨拶が遅れました。自分はこのビルのオーナーで須藤と申します」

今度こそ、頭が真っ白。すっと立ち上がって名刺を差し出されたんだけど、腕が震えて上手く受け取れない。

「それで、具合の悪いドアというのは――」

どんだん話を進めていく彼に対し、完全に置き去りにされてしまってる私。

え、え……：ビルのオーナーってことは。その……：もしかして、もしかなくてもこの方って来店されたお客様じゃなかったの。

うわー、これって痛恨のミス!?

「すっ、すみません！ 本当につ、申し訳ございませんでした……!」

ひーっ、どうしたらいいの！ もうっ、やだやだっ、自動ドアの点検？ そんなの、一言も聞いてなかったよ。

慌てて頭を下げまくる私に対し、彼は少しも変わらないやわらかな物腰で答えてくれる。

「あ、いえ。どうかお気になさらないで下さい、すぐにご説明しなかつた僕の方にも責任がありますし」

「そんないいんです、優しく許してくださいさなくても。素敵に微笑まれても、今はさすがにときめけないよ……」

「あ、たぶんこのドアですね。なるほど、確かに動きがよくない。すぐに修理に来てもらえるよう、手配しましょう」

そこでタイミングよく携帯が鳴り出す。「ちよつと失礼」と短く断つてから通話ボタンを押した彼は、短いやりとりのあとでこちらに振り向いた。

「では、オーナーよろしくお伝え下さい。コーヒーをご馳走様」

滑りのよくない自動ドアが開いて閉じて。素通しのドアの向こう、広い背中がエレベーターホールへ消えていくまで、私は呆然とその場に立ち尽くしていた。

2

もーっ、信じられない！ どうして最初にきちんと確認しなかったんだろう。こんなので接客の基本中の基本だよ。

もちろんすぐに叔母さんに連絡してみた。でも何度かけ直しても『おかけになった電話番号は……』という非情なメッセージが流れるばかり。

仕方ないから、今度はいつも夕方から助っ人に入ってくれてる佐藤チーフに泣き付いてしまった。日中は本社の総務にすることが多い彼女は、ちょうど手が空いてたからと話を聞いてくれる。

『あらー、そのことは支店長から直接言付かかっているとばかり思ってたの。ごめんなさいね、私の

伝達ミスだわ。でも、須藤オーナーを新規のお客様と間違えるなんて、普通だったらあり得ないわよー。いかにも麻衣ちゃんらしいわ』

そう言いつつ笑いを堪えているのが、携帯越しにも丸わかり。

人の大失態をそんな風に軽々しく片付けなくて欲しいな。仮にもあちらは、このビルを所有している「大家さん」。あまりに失礼なことをしたら、即刻立ち退きを要求されちゃうかもしれない。そうなったって、こっちは文句も言えない立場なんだから。

『ふふふ、でも彼つてとっても格好よかったですか？ もしかして、麻衣ちゃんの好みかしら。思わずときめいちゃったりした？』

……あのー、佐藤チーフ。そういう問題ではないと思うんですけどっ。

『彼、半月前にアメリカから戻ってきたばかりなのよ。前オーナーのお父様から不動産を引き継いで、とても頑張ってるの。若いのにあれでなかなかのやり手みたい。そうか、この間ご挨拶に見えた時は麻衣ちゃん、まだ本店で研修中だったものね。今日が初顔合わせだったってわけか』

仕事の邪魔をしては申し訳ないと早々に電話を切ったものの、こっちはプラスチックシオンが溜まりまくり。しかも、叔母さんのこともどうも言えずじまいだったし。

とりあえずそのあとの面談もきちんとこなしたけど、お客様と会話を続けつつも頭の中では違うことばかり考えてた。

そして五時。待ちに待った佐藤チーフが出勤して、ホツと一息。

「麻衣ちゃん、お疲れ様。いろいろ大変だったみたいね」

「そうなんですよ、チーフ。しかも、叔母さんが……!」

よく考えたら、そっちを先に報告しなくちゃだったのね。さっきの電話ではすっかり気が動転していて、どこかに飛んで行ってしまってたみたい。

泣き付く私に彼女は苦笑い。

「何かね、見えちゃったみたいよ、赤い糸」

あ、よかった。叔母さん、佐藤チーフの方にもちゃんと連絡入れてたんだ。そうだよなあ、こんなことを私からの伝言で済ませたら、あまりに失礼だもの。いちから説明しなくちゃならないのかと思っただから、すぐホッとした。

「まあ、支店長も長年の夢が叶ったんだし、これはもう仕方ないことでしょう。本部にも話を通したから、しばらくは私もここにフルで入れると思うわ。今後のスケジュールを考えると、もうひとりでいい助っ人が欲しいところね。それも上を通して検討するわ」

さすが、ベテランアドバイザーの彼女は頼りになる。佐藤チーフが籍を置いているのは本店だけでなく、随時手薄な支店に助っ人に入っているんだって。その豊富な経験を活かして、どんな状況にも臨機応変に対応してくれるから本当に有り難い。

この人が我が道を突き進む叔母さんを上手に操作してくれたから、ここまでやってこられたんだよね、きっと。ひとりである時は不安で不安で仕方なかった私も、佐藤チーフの余裕な笑顔を見ると次第に気持ちが落ち着いてくる。

しかも、その時の私の頭のほとんどを占めていた「ビルオーナー相手にまさかの失態」の一件を華麗にスルーしてくれて、こういう心遣いもさすがだなと思う。

「そうですね。かなり驚きましたけど、ある意味叔母さん、いえ支店長っぽいっていうか……」

勤務時間内は役職名で呼ぶようにと言われていたんだけど、ついついいつもの癖が出ちゃう。慣れないうちは仕方ないと大目に見られているものの、そろそろきちんとできないとヤバイかも。

でも、考えれば考えるほど謎。出会ってすぐにハネムーンってどういうこと？ 搭乗手続きとか言っただけど、それって間違いなく飛行機だよな。いったいどこまで飛んでっちゃうつもり？

叔母さんのやることって、本当に意味不明で理解に苦しむなあ。

「麻衣ちゃんも、今までよりも仕事のスケジュールがタイトになることは覚悟しておいて。この先しばらくは、ほとんど有給も取れなくなると思うわ」

そういう状況になることは、叔母さんから電話をもらった時点である程度は腹をくくってた。

「まあ、今日のところは急ぎの仕事もないし、もう上がっていいわ。あとのことは私に任せておいて。今日は本当に疲れたでしょう」

そこで佐藤チーフはウインクひとつ。余計なことを言わずに済ませてくれる辺り、本当に人間ができてるなああって思う。

今日は有り難くそのお言葉に甘えよう。また明日一日も頑張って乗り切るために、ゆっくりと身体と気持ちを休めなくちゃ。まだまだ不安は尽きないけど、大変な事態がもし起こったらその時、改めて考えたらいいんだし。

「あ、ありがとうございますっ！」

連絡事項を伝え終えて、私は裏の従業員スペースに向かう。

「ローズマリー」の所員用制服は、淡いピンクの上下。中に着るブラウスは自前で、白ならば何でもいいことになってる。今日私が着ているのは襟元にリボン結びのボウタイが付いたもの。ちよつと清楚でお嬢様風かなと思ってるんだけど、どうかな。

かつちりした服装からキャミワンピに着替えると、本来の自分に戻った気がする。今日は少し肌寒いから、上にレーシーな上着を羽織ってみた。うんうん、これなら昼間面談した彼女の十倍は好感度が高いと思うんだけどなーっ。

……いけない、こんな風に考えてたら性格悪くなっちゃう。

この業界に入ってから、研修期間を含めてもまだひと月。でも短い時間の中で、今までの人生では考えられないくらい、いろいろな人間に会ってきた。みんな「出会い」を求めているけど具体的にどうしたらいいかわからなくて、「プロ」の力を期待してるんだ。

中には努力する方向を間違えている人もいたりして、思わず「何だよ、それ」って突っ込みたくなっちゃったり。こんな仕事を何十年も続けている叔母さんには、本当に頭が下がる。だけどそのことを言うと、彼女はこう答えるの。

「これほど素敵な仕事、世界中のどこを探してもほかには見つからないわ」

……きつと私は、どれだけの経験を積み重ねたとしてもそんな心境にはなれないと思う。

そんなことを考えつつ、エレベーターで一階のホールまで下りてきた。そしてエントランスのピカピカに磨き込まれた床の上を一気に通り抜けたところで、不意にうしろから声をかけられる。

「こんにちは。今、お帰りですか？」

どこかで聞いたことのある声だなあ、と何気なく振り向いてびっくり。うわっ、この人って、昼間の——そう、須藤オーナーじゃない……！

「はっ、はい！ そ、そのっ、……先ほどは大変失礼いたしました……！」

頼むから、いきなり出てこないでよ。そりゃ、これきり二度と顔を合わせないのは無理だと思っただけ……

「いえ、こちらこそ。ああ、修理の業者ですが、明日の午前中にきてもらえることになりましたよ。今からご連絡しようと思っていたんです。そうしたら、管理人室の窓からあなたの姿が見えて」

相変わらずの低姿勢、物腰がすごくやわらかで好感が持てる。爽やかな笑顔もやっぱり素敵。

「そ、それは、わ、わざわざありがとうございますっ！」

対する私はさつきから台詞を囁みまくり。もうっ、恥ずかしすぎて顔から火が出そうだ。

確かこのビルって、エントランスの一角に管理人用のスペースがあったはず。彼はいつもそこにいるのかな、そして私の姿が見えたからわざわざ出てきてくれたとか？

すごいなあ、電話一本で済むことをこんなに丁寧に丁寧に。テナント側の人間としてとても感激してしまっわ。

「では、私はこれで……」

うーん、絶対にわかってないよね、私がすごく慌てるの。

こうしてふたりが会話をしている脇をさつきから帰宅途中の人たちがたくさん通りすぎている。みんな、彼の方を振り返っていくんだよ。身長も結構あるし、かなり目を引くルックスだしね。この人がビルのオーナーですごくお金持ちだって知らなくなっちゃって、見とれてしまうとと思う。

「――あ、ちょっと待って下さい」

くると背中を向けて歩き出したところで、再び呼び止められる。

「これから何かご予約はありますか？ もしもお暇なら、一緒に食事などいかがでしょう」

え、何で？ って言葉が、喉の奥に貼り付いて止まってしまった。きつと今、すごい変な顔をしていると思う。でもそんな私を見ても、彼の優しい表情は少しも崩れることがない。

「折り入ってお話があるんです、よろしいでしょうか」

思いがけない誘いに驚きすぎて、それってどういうことですかとか訊ねることも忘れていた。何で私がこのビルのオーナーと食事を？ いったい何がどうなってるの!?

彼が予約してくれたレストランは、静かな住宅地の一角にある洋館だった。建物の前には贅沢ぜいたくに作られたバラ園があつて、それだけでも見応えはたっぷり。しかも夜間である今は、その庭が間接照明で幻想的にライトアップされている。

普段の生活では絶対に足を踏み入れることのないような、とても高級そうな場所だった。

「いらっしやいませ。お待ちしておりました、須藤様」

建物の入り口で待っていたオーナーらしき紳士に、深々と頭を下げられて慌ててしまう。何だか、場違いすぎない？ こんな普段着で大丈夫なのかな。

「さあ、行きましょう。……ええと」

どうしても店内に入ることができなくて立ち尽くしていた私を、振り返った彼が呼ぶ。そこにきとお互い初めて気づく。そうだ、私ってまだこの人に名乗ってなかったんだ！

「あ、……私、宮内と申します」

やばーっ、ご来店下さったお客様には最初に自分の名前を伝えるようにと言われてるのにつ。今日はもう、何もかもがマナー違反でどうしようもない。

塩をかけられたナメクジみたいになびていく私に、彼は静かに微笑んでくれた。

「宮内さん。ここは僕の馴染みの店ですから、遠慮なさらずにどうぞ」

そうは言われてもね、やっぱり緊張して身体が上手く動かない。もしかして今の私、右手と右足が一緒に出てない？ ガラスに映る姿が、ロボットみたいにガクガクしてる。

一番奥のテーブルで、私の到着を静かに待っていた先ほどの紳士が椅子を引いてくれた。こんな初めて。うーん、何もかもが慣れてなくておっかなびっくりだ。

「この料理は何でも美味しいから、おまかせのコースでいいでしょうか。宮内さんは、何か苦手なものがありますか？」

私が小さく首を横に振ると、彼はまたにっこり微笑む。

「ではそれで」

メニューを受け取ると、紳士は静かに席を外す。その時になってようやく店内の様子を確認することができたけど、何と言うか……すべてが上品すぎて身の置き場がない。

だって、ここに到着するまでだって大変だったんだよ。

帰り支度を終えた彼とビルの外に出ると、そこには黒塗りの車が待っていた。運転席から降りてきた男性が、当然のように後部座席のドアを開けてくれて。いったい何ごとかと思ったら、これが彼専用の車だって言うじゃない。えーっ、運転手つきの車って……どんだけ？

勧められるままに乗り込んだけど、座席は座り心地抜群で走り出してもほとんど振動を感じない。ということは、かなりの高級車なんだよね？ 正真正銘のお坊ちゃまって、こんなすごい車に当たり前のように乗っているんだと感心させられてしまう。

すぐに彼の携帯が鳴り出して、車の中ではずつと通話中。何だか難しそうな内容の会話で、これって聞いちゃまずいんだろうなってドキドキしちゃった。そんなわけで車内でも別の意味で緊張しまくり。

「すみません、突然このような場所に連れ出してしまって」

私があんまり縮こまっていたからかな、彼もとても恐縮した表情になってる。

「あ、いいえ、私の方は大丈夫です。……その、確かにちよつと驚きましたけど」

屋間のアレはすべてが私の勘違いで、失礼なことをしたと反省している。もちろん、あのあと記入途中だった用紙はシュレッダーにかけて破棄したし、それでおしまいになるとばかり思ってた。まさか今更、そのことを蒸し返そうとしているんじゃないよね？

だって、そうじゃなかったらつじつまが合わない。

ビルのオーナーとそのテナントの一従業員がダイナーテーブルに向かい合っているって、かなり異様な光景だよ。わかってるのかな、この人。

——とは思うものの、こっちらからそれを訊ねることなんて絶対に無理……！

「……そうですか、ではこちらに移られてまだ間もないんですね？」

そのあと、相手の真意もわからないままお互いに軽く自己紹介したりして。私が転職したての駆け出しだったってことも、あっさり白状してしまった。

「ええ、ですから先ほどのような失敗も。……本当に、申し訳ございませんでした」

あーっ、自分でもしつこいなあとと思うんだけど、須藤さんの顔を見るたびに何度も何度も思い出して恥ずかしくなってしまう。

「いえ、いいんです。こちらとしても、なかなか興味深い体験でした」

——そりゃそうですよ。今日みたいなことがなかったら、一生関わることのなかった世界だと思ふもの。

須藤隼人^{はたと}さん、二十八歳、結婚歴なし。実家は不動産管理業を手広く営んでいる地元の名家。

某有名大学を卒業後に大学院に進み、そこでも続けて経営学を学ぶ。修士課程を終えたのちに渡米、現地の大学でさらに学びつつ複数の業種の企業研修も積極的に受けてきた。

友人の誘いでベンチャー企業の立ち上げに関わるも、半月前に両親の強い希望により帰国。今は家業を継ぐために父親の下で修行中。

シュレッダーにかける前に、ついつい読んでしまった略歴。さらに付け足すなら、趣味は「テニス・スキー・登山」だった。

本当にこういう人がいるんだな。ドラマや小説の世界ならあり得ても、現実にはいないんじゃないかと思ってた。しかもかなりのイケメンで、それなのに本人はそんなことまったく意識してない感じだ……

「ようやく日本に戻ってきましたが、何かと慌ただしくてなかなかゆっくりできなかったんです。この店は僕の隠れ家的な場所です、やっと訪れることができてとても嬉しく思っています」

さらに物腰もやわらかで、一緒にいるとすごく大切に扱われているなって幸せな気持ちになれる。もしもこんな人が、パートナー候補として目の前に現れたら、お相手の女性は目の色が変わっちゃうだろうな。人間的にも完璧で、その上絵に描いたような「玉の輿」。こんなオイシイ話、二度とないと思うもの。

……うーん、そうだなあ。この人にびつたりの相手ってどんな女性だろう。残念ながら私の少ない引き出しでは、すぐにはコレというイメージが浮かばない。

「宮内さんの勤めていらっしゃるお店は、とても評判がいいそうですね。管理会社の社員の間でもよく話題になっているんです。だからいろいろと話を聞いてうちに、一度ぜひ詳しいお話が聞いてみたいと思っていました。ようやくその機会が持てて、とても嬉しいです」

美味しいワインで乾杯したあとで、綺麗に盛りつけられた前菜が運ばれてきた。丁寧に作られたパテや生ハムに、たっぷりの野菜が添えられている。

「大手チェーンの看板を掲げてはいますが、お店独自のサービスも展開していて、それがとても好評だそうですね」

須藤さんは食事のマナーも完璧。とろとろのソースのかかったリーフはどうやって口に運んだらいいのか悩んでしまったけど、目の前に「お手本」がいてくれて助かった。

「あ、それは叔母さん……いえ支店長の前田の得意技があるからできることなんです」

新しいプレートが運ばれてくるタイミングでふと会話が途切れても、まったく気まずさがない。まるで水が高い場所から低い場所へと流れていくように、さらさらとよどみなく会話が続いていく。「へえ、あのオーナーの得意技？ それはとても興味深いですね。具体的にはどのような内容なんですか？」

ゆつたりとした手つきでナイフとフォークを扱いながら、彼はさらに質問を投げかけてくる。

「あ……いえ、とりたててお話しするようなことでもないのですが」

この話は研修でお世話になった本店所員の間でも、とても有名だった。私が彼女の姪だつてことも知れ渡っていたから、いっぱい質問されて困っちゃったよ。

でも実は、口に出して説明するとても簡単な話になっちゃうんだよね。

「前田には、『千里眼』があるようなんです。本人が言うには、パートナーとなるふたりの間に繋がっている赤い糸がはつきり見えるのだとか。だからその閃きに従っていれば、まず間違いがないようなんです」

正確には面談に訪れた会員を前にすると、その人にびつたりの相手のイメージが瞬時に思い浮か

ぶんだという話。そんなの絶対に嘘だとか思っちゃうけど、実際にその能力は多くの事例で証明されている。

「何でも、幼稚園の頃から『お見合いおばちゃん』だったらしくて。今まで誕生させたカップルは正確にカウントすることはできないくらい多いみたいです」

叔母さんは私の母親の妹に当たる人で、私は生まれた時からずっと叔母さんのことを知っている。いつも笑顔でキラキラしていて、昔からとにかく前向きな明るい人だった。

「とても華やかで素敵なお方ですね、僕も初めてお目にかかった時にそう思いました」

やっぱり異性の目から見ても、叔母さんは魅力的なんだな。男性会員さんの中にもファンが多いって聞いてたけど、こうやって面と向かって言われると自分のことでもないのにドキドキちゃう。

「ありがとうございます。でも実はあ見えてかなり口が悪いんですよ。普通の人が遠慮して言わないようなこともズバズバ言うから、それで会員さんが怒って退会されてしまうこともあるかと……ふふ、それも本人が言うには『武勇伝』だそうですね」

すべてにおいて「熱い」叔母さんは、真面目に出会いを求めている会員さんとはがっつりと向き合う。だから、衝突も多いみたい。今は親にすら本気で叱られたことはないっていう若者も多いから、すごくびっくりされるみたいだよ。

「へえ……じゃあ僕も今後のお付き合いでは、十分に気をつけていかなければなりませんね」

いえない、須藤さんだったら絶対に大丈夫。むしろ好印象だと思っわ。

和やかなおしゃべりが交わされている間にも、次々と料理が運ばれてくる。素材の味を十分に引

き立たせるシンプルな味付けで、どれもがとても美味しい。

このテーブルに彼と向かい合って座りたいと思っている女性は大勢いるんじゃないかな。今夜は偶然私が誘われたわけだけど、ほかに候補者はたくさんいそう。

——何で、こんなにすべてが素敵なんだろう。これでもうちよつと普通だったら、私だって……

ナイフを差し込む必要もないくらいやわらかいミニステーキ。ソースの絡み方も完璧だ。自分の心の中に一瞬湧いてきた不思議な感情に驚きながらも、私は小さな一切れを呑み込んだ。

「そちらのお店の『無料カウンセリング』では、どのようなサービスが受けられるのですか？」

須藤さんはとても嬉しそう。ようやく念願の場所で食事ができて、幸せいっぱいって感じた。

うん、……私の方も幸せ。

料理はどれも絶品だし、サービスは申し分ないし、目の前の男性も好みにはぴったり。だけど、……だからこそ、すごく悲しかったりする。

どうして、この人はこんなにうちの業務に興味を示すの？ それってもしかして、やっぱり——

「その……、須藤さんはまさか本当に当店への入会をご希望なのですか？」

だからつい、口が滑っちゃった。こんな台詞、結婚相談所の所員としてはあり得ないよね。でも、どうしても言わずにはいられなかったの。

「は？」

当然ながら、驚いた顔になる須藤さん。やっぱり、もう少し控えめに切り出すべきだったかな。

やばいなあと思ったけど、もう止まらなかつた。

「須藤さんなら、他人の力を借りなくても、素敵なお相手を見つけることができるはずです。だから、その努力を惜しまないで下さい」

特殊能力を持つている叔母さんは、それを自分を頼ってくれるたくさんの人に分け与えている。それで叔母さん本人も相手の方も幸せになれるならそれでいい。

……だけども。

しん、と静まりかえったテーブル。互いの顔が強ばっている。何やってるんだろう、私たち。そう思つてたら、彼の方が先にふっと表情を和らげた。

「あ、……いや、気を悪くされたのなら謝ります。申し訳ありませんでした」

そしてまた、あつさりと頭を下げてくれちゃうんだよな。こういう時に無理に取り繕つたり、自分に都合がいいように話をすり替える人だつていくらでもいるのに。

「宮内さんはとても話しやすい方なので、ついつい無駄話がすぎてしまいました。すみません、こちらの用件から先にお伝えするべきだったのに」

申し訳なさそうにそう告げられてしまうと、すぐに許してしまいたくなるから不思議。この人には私の怒りを吸い取ってしまう不思議な力があるのかも知れない。

「宮内さん、あなたにお願いがあります」

そこで突然、私たちを取り巻いていた空気が、さあつと緊張感を帯びる。

一点の曇りもない誠実そのものな瞳の色。それが私を真っ直ぐに捉えている。何なのこれ、どうなっちゃうの!? いくら抑えようとしても胸の高鳴りが止まらない。

「僕に、恋愛の仕方を教えてくれませんか？」

「——は？」

一呼吸置いてから、半開きの口元のままで聞き返していた。そんな私に彼は、当然のように言い放った。

「僕には婚約者がいます。彼女と幸せになる方法を、宮内さんにぜひ伝授して欲しいんです」

テーブルを挟んで無言で見つめ合う私たちの下に、デザートプレートのプレートが運ばれてきた。

都内にビルや店舗をいくつも所有している大地主。月々支払われる家賃収入で生計を立てているなんて、しがないサラリーマン家庭で育った私にはまるで想像もできないような話だ。

そんな彼には運転手つきの車だけではなく、将来を誓い合った婚約者まで存在した。まあ、それも……ちよつと考えたら予想がつきそうな話かも。

真剣な瞳で見つめられて、もしやこれから伝えられるのは愛の告白!? とか一瞬でも考えてしまった自分が情けなさすぎる。

「彼女さんと幸せになる方法、ですか」

放心状態のままデザートを食べ終えたから、残念ながらからお味の方はよく覚えてない。舌の上でとろけていくアイスクリームは間違いなく絶品だったはずなのに、すぐくもつたいたいことをした。

「そのようなこと、急に言われましても……」

慌てて言葉を濁した私の頭は混乱しまくります。

小さなカップに注がれた薫り高いコーヒー。いつもならノンシュガーなんだけど、今はちょっとだけお砂糖が使いたい気分だ。

「いえ、ここはどうしても宮内さんをお願いしたいんです。出会いのカリスマと呼ばれるオーナーの姪御さんなら、絶対の信用が持てますから」

イケメンのお金持ちは、考え方までもが私とはまったく別次元の人だった。

こんな話に乗っては駄目、だって絶対に間違ってるもの。

そりゃ、今はサービス産業が真つ盛りのご時世だよ？ 恋愛にしたって、ハウツー本から雑誌の特集記事までいろんな情報がばんばん出てる。まるで「この通りにすればすべて上手く行く！」って言わんばかりの強気の発言もあつたりして。

でもさ、こういうことを最初から他人任せにしちゃ駄目だと思う。うちの結婚相談所だって相手選びにはいろいろ力を貸すけど、出会ったふたりがそのあと上手く行くかどうかは、本人たちの努力次第だ。

それに、お互いが歩み寄っていくという過程が一番オイシイ部分でしょう？ そこをすつ飛ばしでどうするの。

「は、はあ……」

「日頃から出会いをプロデュースするお仕事をなさっている宮内さんなら、何かいいアドバイスがいただけるかと思つたのですが」

何なのかなあ、この人。不思議すぎて、私の価値観ではとても理解できない。そう思いつつも、

断るきっかけを探せないでいるんだから駄目だな。

だって、よくよく考えたら須藤さんってうちのお店にとっては「大家さん」なんだよね。あまり邪険にするのもどうかかと迷い始めると、なかなか覚悟が決められなくて。

「ええと、……しばらく考えさせてはいただけませんか？」

それにここで貸しを作っておけば、将来家賃交渉とかで有利になるかも知れないわ。にわかには打算的な考え方に傾いてしまった自分が悲しい。

「そうですか。それではぜひ、前向きな回答をお待ちしています」

その瞬間に私に向けられたのは、親愛に満ち溢れた素敵すぎる笑顔。この表情だけで、ほとんどの女性は落ちると思うんだけど、当の本人はそのことにまったく気づいていないみたい。

3

翌日、普段よりも三十分早く出社すると、佐藤チーフはすでに自分のデスクについて作業を開始していた。もちろん制服に着替え終え、身だしなみもばっちり。

さすが、常に時間に余裕を持って行動することで知られている佐藤チーフ。いつも開店時間ギリギリに駆け込んでくる叔母さんとはまったく違いわ。明日からはもう三十分早く家を出ようと、私は強く決意した。

「午前中に表のドアの修理ですって？ それなら面談には一番奥のスペースを使いましょう。朝イチのお客様って支店長が担当していた方だったわよね。今日は私が代理で引き受けるから、麻衣ちゃんにデータ入力をお願い」

ひさびさのふたり体制はすぐ楽。本当だったら今朝からは、叔母さんが復帰してこうなるはずだったんだ。ここ数日はスケジュールをゆったりゆたかにしてもらってたし、大きなイベントもなかったからどうにかやってこられた。でも、これ以上は無理。

結婚相談所って、内情を知らない人には謎なスペースだよ。でもやっていることは、近所の「お見合いおばちゃん」の延長、それが少し大がかりになってきちんとシステム化されているだけなの。

会員になるには、入会金と所定の月額利用料を納めてもらう。そうすると、「ローズマリー」全店舗共通の会員データに情報が登録されて、それが社内を設置されている端末で自由に閲覧できる。そこで希望にあった会員を見つけたら、会員に割り当てられたメールアドレスを利用して連絡を取り合ったり、直接の面会を申し入れたり。もしも自分でアポを取るのが恥ずかしいって方は、こちらで代行も承っている。

一対一の出会いのほかにも、ひと月に十回ほど開催される合同パーティがあって、そこで大勢の会員の中からお目当てのひとりを見つけることも可能。もちろん、会員の方とは折に触れて面談を行って、それぞれのご希望にあったプランを提供してる。

入会金と月額の利用料を合計すると、年間では結構なお値段になる。それでも合理的に出会いを求める人は大勢いるみたいで、毎月新たに入会なさる方がウチの店舗だけでも十人は下らない。全店舗を合計すると百人以上ののぼって、「ローズマリー」全体では常時何千人規模の会員を抱えている。それだけ多くの人が出会いを求めているってことね。

それぞれの会員さんと個別に面談しているとしみじみ思うわ。今の人たちってみんな忙しすぎる。仕事ももちろん、遊びやその他もろもろの付き合いもあって、個人的な恋愛にそれほど多くの時間と労力を費やせないっていうのが本音みたい。

まあ、思い起こしてみれば私自身もそうだったもんな。前の会社に入社した時もどんな素敵なオフィスラブが待っているのかとわくわくしたけど、実際はドラマのような物語が始まることはなかった。そうしているうちにリストラどもん、ホントに悲しい人生だわ。

「おはようございます！ 自動ドアの修理に参りました」
三人分の修正データを打ち込んだところで、元気のいい声が入り口から聞こえてくる。見るとそこには作業服を着込んだ若者がふたり、ここがどういう場所かわかっているらしく興味津々で中を覗き込んでいる。

「あ、そちらの左側のドアです。よろしくお願いします」

入力用の端末をオフにして、ロックをかけたあと席を立つ。住所氏名といった個人情報載せていないデータはあるけど、やはり管理は厳重にしないと。このことは最初にとくに厳しく言われている。

そろそろ面談の会員さんが到着する時間、業者さんの分も合わせてコーヒーを多めに落としても

大丈夫かな？

「おはようございます、ご苦勞様です」

ドリツプ用に挽いたコーヒの粉をスプーンで計っていると、表からもうひとりの声が出た。顔を上げると、……あ、須藤さんだ。

「おはようございます」

ぱちつと目があつた瞬間に、私は小さく頭を下げた。昨日とは違ふ、でもやっぱりひとめ見ただけで上質の素材で作られたということがわかるスーツを着てる。もちろん、足下の靴もピカピカに磨かれていて。

彼は作業をしている業者の人たちと軽く言葉を交わしたあと、こちらに進んできた。

「昨日はお疲れ様でした。お帰りが遅くなつてしまいました。大丈夫でしたか？」

心持ち小声になつた彼が、すまなそうにそう切り出す。

「あ、いえ。こちらこそ、ご馳走様でした」

奥のテーブルには接客中の佐藤チーフがいるしね、営業時間内でもあるから私語は極力慎まなくちゃ。

だけど、彼が言うことはもつともなの。

ゆつたりした食事を楽しみつつおしゃべりに花を咲かせていたら、いつの間にかとても遅い時間になつていた。ふたりして時計を確認して、びっくりしちやつた。もちろん帰りもアパートの前まで車を回してもらつて、すぐく遠回りをさせてしまつたと思う。

「修理、すぐに終わりそうですよ。完全に壊れる前だつたから、微調整でどうにかなるようです。大事おおじにならなくてよかつたですね」

「そうですか、さつそく手配してくださつたお陰です。ありがとうございます」

一度頭を深く下げてから、彼の方に再び向き直る。

「よろしかつたら、コーヒをいかがですか？ ちょうど淹いれたところですから」

私の言葉に、彼は静かに首を横に振つた。

「いえ、これから打ち合わせがあつて、すぐに行かなくてはならないんです」

そうか、やっぱり忙しい人なんだな。ま、このまま居座られたら業務に差し支えるし、適当なところで切り上げてくれた方がありがたい。

「……その」

そこで会話は終了したんだと思つた。だけど、私が元通りに席について資料を広げても、まだ須藤さんがそこに立つている。

「宮内さん、今日のランチ休憩はいつ頃ですか？」

何でそんなことを訊たずねるんだろう、よくわからない。

「ええと……午後から忙しくなるので、今日は少し早めに。十一時半頃になると思いますが」と彼は腕の時計にちらつと目をやって、少し何かを考えてるみたいだつた。

「では、その頃に下のエントランスでお待ちしています。少々お時間をいただけますか？」

約束の時間が迫つていたのである。彼はそれだけ言い残すと、慌てて立ち去つてしまつた。

これって、やっぱり昨夜の返事を聞きたいってことなんだろう。困ったな、こんなに早く回答を求められるとは思ってなかったから、まだ何も考えてないのに。

躊躇ためらいつつ言われた通りにエントランスに降り立つと、出かける支度を終えた彼が待っていた。今日は少し肌寒いから、その腕には薄手のコートがある。

「すみません、午後からほかに回ることになってまして。さあ、急ぎましようか」

ここは日中も人の出入りがすごく多い場所。通りすがりの人がすべてハツとして振り向くほどの素敵な彼に突然呼び止められたら、周囲の視線が気になって気になって仕方ない。

「そ、そうなんですか……」

仕事だから、私の方は制服のまま。「ローズマリー」の所員です、って看板を背負って歩いているようなものなのよ。ふたり並んだら、何ともちぐはぐな組み合わせだと思っわ。

「少し歩いたところに喫茶店がありましたね、そこでよろしいですか」

あ、よかった。今日は黒塗りの車で移動じゃないんだ。真っ昼間からアレをやられたら、ちょっとした衝撃だったかも知れないわ。

街はそろそろ日中でも上着が手放せなくなる頃。だけど、空気がサラサラしていてもさすがやすい季節だ。街路樹の葉っぱも綺麗に色づき始めてる。ありきたりの風景も、彼と並んで歩くすごく輝いて見えるから不思議。

歩きながら、彼はゆっくりとした口調で話し出した。

「今朝、彼女をデートに誘ってみました。今度の日曜日にしました」

やっぱり、昨日の話の続きか。……と言うか、経過報告？ そんなのいちいち私にしてくれなくてもいいと思うけど。

ちょっとトゲトゲしてしまう気持ちを必死で吞み込んでいると、対する彼の方は期待に満ちた瞳で私を見つめてくる。

「話が具体的に動き出したので、ここはすぐにでも宮内さんに秘策を伝授していただかなくてはと思います」

えーっ、またコレだよ。いい加減にして欲しいよなあ、まったく。

「秘策も何も、ご自分でいつもなさっているようにすればいいじゃないですか？」

多少苛いらついた声になってしまったことは許ゆるして欲しい。会員さんとのやりとりならば、もうちょっとオブラートに包んだ言い方にするんだけど、今回は歯止めがきかなかった。

どうせ、海外にいる頃は女性を取っ替え引っ替えとか楽しいことしてたんでしょ。ホント、黙ってたって女性がわらわらと集まってきそうなタイプなもの。それを今更、カマトトぶらないですよ。

あ、いや、カマトトって男性相手にも使う言葉なのかな……？

「僕がいつもしているように……ですか？」

でも、彼は私の言葉にわかりやすく困った顔になる。それを見て、さらにイラっときてしまう。

「そうですね、昨日の晩みたいに女性と一緒に食事をしたり、須藤さんは今までだって普通になさっていたでしょう？」

そして、それ以上のことだって当然——という言葉はさすがに自主規制。やばやば、もうちょっとで口から飛び出しちゃうところだったよ。うら若き乙女が、公衆の面前でそんな発言をするのはいただけない。

「そんな……」

彼は信じられないという表情で私を見ると、首を何度も横に振った。

「仮にも婚約者がいる身で、ほかの女性と付き合うなんて許されることではありません。まったくもって倫理に反することです」

——何、それ。

「ええと、でも、昨夜は私と食事をしてますよ」

「宮内さんは特別です、彼女と幸せになる方法を僕にいろいろ教えてくださる方なのですから。いけば、先生のような存在です」

今度は私の方が呆気にとられる番だった。何でいきなり真顔でお叱りを受けなくちゃならないの、わけわかんないよ。

冗談のつもりなのかとも考えたけど、本人はいたって真面目な感じだし。

「その……もしやとは思いますが。まさか、今までいわゆる……一対一のデートのご経験がないとか？ 彼女さんとも今回が初めてとか、そんなのあり得ませんよね」

いや、絶対に違うとは思ったんだよ。でも、何だか悪い予感がしたし、そうだとしたら、今まで話のつじつまがすべて上手く合うような気もする。

「ええ、実はその『もしや』です」

これには私の方もびつくり。えーっ、嘘っ。その歳で、そのルックスで、女性と一対一で出かけたことがないなんて……そんなの絶対に変。

「……あ、もちろん仕事上の付き合いで一緒にいた方は幾人かいますよ。仕方ないんです、女性だからと断ったりしたら『男女で扱いを変えている』ということになって、その行為をセクハラで訴えられかねませんからね」

私の驚きが大仰なものに見えたのだろう、彼は慌ててそう付け足す。でも、そんなことは言っても言われなくても大差なかった。

「そう……なんですか」

こちらはもう、力なくそれだけ答えるのがやっと。まだ百パーセント彼の言葉を信じたわけじゃないけど、やっぱり嘘ついているようには見えないし。うーん、厄介な人とお知り合いになっちゃったなあ。

「彼女を悲しませることなんて、僕にはできません。そんなこと、今まで一度も考えたことはありませんでした」

その挙げ句が「彼女と幸せになる方法を教えてください」？

考えることが極端なんだよなあ、この人って。仕事とかバリバリできそうな感じなんだけど、そこで培ったノウハウを恋愛に活かそうとは思わないのかな。

「ところで彼女さんとは、普段どのようなお付き合いをなさってるんですか？ もちろん、そ

の方も須藤さんとの結婚に同意されているんですよ」

これ以上深入りするのはやめようと思いつつ、ついついお節介を焼いてしまう。やっぱり、叔母さんの血筋？ ううん、須藤さんが必死すぎるから可哀想になってしまった。

「ええ、直接そのことを訊ねたことはないのですが、同意してくれているはずですよ。ふたりの結婚は子供の頃から決まっていたことですし、何度か両親に連れられて互いの家を訪問したこともありますが」

へー、ということは「親同士が決めた婚約者」？ さすが、お金持ち。やる事がこつちの想像を遙かに超えてるわ。やっぱり彼女も運転手付きの自分専用車を持っている人なのかな。

「ただ、年が離れていることもあって、その頃は会話らしい会話もありませんでした。僕が大学を出てアメリカに発つ時になっても、彼女はまだ高校生でしたし……だから、まだまだその頃の印象が根強くて、自分でも困っているんです」

彼より六歳年下の彼女は、今年の春大学を卒業したばかり。今は自宅で花嫁修業をしている身の上だと言う。そこまでお膳立てされていて、上手くいかない方がおかしいと思う。

「とても可愛らしくて、ずっと守ってあげたい女性です」

そんなに目をキラキラさせて力説しなくても。何だかこつちはすごく虚しくなってるんですけど。「なら、……それで十分だと思います」

これは私の勝手な想像なんだけど、その六歳年下の婚約者さんは須藤さんのことがすごく好きだと思う。だからその気持ちをしっかりと受けとめてあげることができれば、それでいいんじゃないかな。

「やはり、……宮内さんもそう仰いますか」

そんなにしょんぼりすることはないのに、不思議な人だなと思う。

何だろう、なまじ頭のいい人だから、どうでもいいことを堅苦しく考えてしまうんだろうか。世の中には「ま、この辺で妥協するか」とか適当に結婚しちゃうカップルだっていると思うのに。それでもみんな結構幸せに暮らしてたりするし……だから大丈夫だよ。

「あ、もちろん。私個人としては思いつきり恋愛して、その上で生涯のパートナーを決定するのが最高かと思えますけど」

自分までが打算的な考えに引っ張られそうになって、そこで慌てて踏みとどまった。駄目よ駄目、ほかの人はそれでよくても、私はそうじゃないもの。

「そうですか、宮内さんにはそんな素敵なお相手がいらつしやるんですね。羨ましいです」

何、その見当違いなコメントは。

ここで「はい、その通りです！」と見栄を切れたら最高だったんだけど。変なところで正直者な私はそれができないんだな。

「あ、いえ……その。そんな相手を、目下募集中でことごと」

ゴールイン直前の相手がいる人の前で、こんな情けない発言をしなくてはならないのが悲しい。でも仕方ないわ、私の恋愛観にぴったりと見合う相手がなかなか現れてくれないのがいけないのよ。「本当に楽しい方ですね、宮内さんは」

またまた不思議な反応。これじゃ、褒められているんだかけなされているんだかわからないわ。

まあ、須藤さんのことだから、きつと素直に感想を述べてくれているのだと信じたい。

「須藤さんは当日、彼女さんとお会いになるのが嬉しくないんですか？」

ほら、こうやって訊ねれば首を横に振るくせに。何だろうなああって感じた。

結局のところ、相思相愛なんですよ。それで何を悩む必要があるんだろう。世の中には「出会い」がなくて困っている人だってたくさんいるのに。私も間違いなくそのひとりであること、この人絶対にわかっているいな。

「だったら、そのお気持ちを彼女さんにお伝えすればいいんです。私なら、それだけで舞い上がっちゃうくらい嬉しいですよ」

うーん、何だか想像できちゃうな。会いたくて会いたくて待ちきれないほどだった大好きな彼が、自分と同じ気持ちで待ち合わせの場所に現れてくれたら、もうそれだけで胸がいっぱいになっちゃう。

「でも……その先どうすれば」

えー、そんなこと、急に聞かれても答えられるわけじゃない。

私が一瞬逃げ腰になったのがわかったのだろう、それでも彼はさらにたたみかけるように言葉を重ねてくる。

「すみません、でも宮内さん以外に相談できる人がいなくて」

いや、私なんて頼られても困るから！

「そ、そうは言われても、ですぬ……」

曖昧な返答をしつつ、どうにかして彼の質問から逃れる方法を探している私。もうっ、マジで泣きたい気分だよ！

そりゃ、本気で悩んでいる相手突き放すのは気が引ける。でも仕方ないよ、こっちだって恋愛のエキスパートってわけじゃないんだし。思いつきで適当なことをでっち上げるのもよくないですよ。

この仕事も大変だな、いきなり「プロ」とか言われてこんな質問を受けたりするんだから。これからたくさん勉強することがありそうだ。

「……あ、時間」

一緒にランチを、って話だったのに。目的地に向かうまでの道の途中で、思いがけず話し込んでしまった。携帯画面を確認した私の声に、彼もハツとして自分の時計を見る。

「本当だ、いつの間にこんな時間に」

いい大人がふたりして、路上でわたわた。これって昨夜とまったく同じパターン。まったく学習していないって感じた。しかも話し合いはあまりにも中途半端なままだし。でもっ、もう戻らないと！

「じゃあ、私はこれで失礼します。午後のお仕事も、頑張ってくださいね」

やーっ、これじゃコンビニに寄る時間もない！ コーヒーにダイエットシュガーをたっぷり入れて、次の休憩まで持ちこたえなくちゃ。

「あ のっ、宮内さん」

マジで一分一秒を争う感じだったんだけど、悲しげな声で呼び止められるとついつい足が止まっちゃう。仮にもビルのオーナーだと思えば、邪険にできない現金な私。

「もしも宮内さんだったら、どんな一日をすごしたいと思いますか？ 参考までにお聞かせいたければ嬉しいのですが」

もうっ、こっちは本気で時間がないの。須藤さんと違って、運転手つきの車もやってこないんだから、自分の足で戻らなくちゃいけないんだよ。

「あつ、あの私、明日の水曜日は定休ですから。午前中は片付ける仕事があるので出勤しますが、そのあとでしたらお話できます。はい、ここにご都合のいい時間と場所をメールして下さい！」

慌てて取り出した名刺を彼に押しつけると、私は人目を気にすることもなく仕事場へとひた走った。

『表通り公園に午後一時でよろしいでしょうか』

須藤です、という件名のメールを開いたら、あまりに短い本文。もちろん、絵文字とかは一切なし。「……何だか、調子が狂いっぱなしなんだよな」

それでも、待ち合わせ場所がビルのエントランスじゃなくてよかつたとホッとする。毎度毎度あの場所呼び止められていたら、いまに噂になっちゃいそう。たくさんのテナントが入っているオフィスビルだから、どこで誰の目が光っているかわからないよ。

見た目は完璧、いわゆる「三高」も楽々クリア。だけど恋愛初心者、さらに彼女持ち。

転職早々、不思議な人とお知り合いになってしまった私。訳がわからないうちに向こうのペースに乗せられて、いつの間にかおかしな関係ができていた。

ま、ここはもう腹をくくるしかないだろう。それが丸一日かけて私が出した答えだった。いつまでも迷ってたって仕方ない、彼の他人任せな態度には多少疑問は残るけど、頼られちゃったからには受けて立つしかないかなって。

「あ、宮内さん！」

私待ち合わせの公園にたどり着くと、彼はもう先に来ていた。

昨日とも一昨日ともまた違うイメージのスーツをすつきり着こなしている。今日のは落ち着いたダークブルー、ビジネス仕様な感じだけど本人にぴったり似合っている。水色ベースのストライプのネクタイもとてもオシャレ。

「こんにちは、今日はお仕事平気なんですか？」

ウチのお店は年末年始を除いて定休日なし、週末はかき入れ時だから、こんな風に平日に交代で休みを取ることになってる。だけど、ビルのオーナーってどうなんだろう。少なくとも、カレンダー通りにお休みが入ってくるっていうイメージじゃないな。

「ええ、スケジュールが自由になるところが自営業の強みですから。今日の午後の予定は、すべてキャンセルしてもらいました」

さりげなくものすごいことを言われた気がする。ちょっと驚いてすぐに言葉を返せなかったら、

彼の方からさりげなく会話を繋がる。

「ところで、宮内さんは昼食はお済みですか？」

「あ、はい。軽くいただいてきました」

本当のところはね、今朝はすっかり寝坊してしまつて朝食抜き。だから途中で買い込んだコンビニのおにぎりを片手に、溜^たまつた仕事を終わらせた。のんびりやったら一日かかる量だったからかなり頑張つたんだよ。

「僕も済ませてきました。どこかに入って、お茶でも飲みますか」

そんな提案を受けて、ちよつと考える。そうだな、せつかく気持ちのいい秋晴れ。久しぶりの休日だから、これ以上狭い場所に押し込められるのはちよつとなあつて思う。

「お話なら、ここで済ませちゃつても構いませんよ。それほど時間もかからないでしょうから」

芝生の上でくつろいでもオツケーかなつて気分だつたけど、彼のスーツじゃそれは苦しい。それで噴水の近くに置かれたベンチにふたりで腰かけることにする。

「ええと、昨日の質問なんですけど……」

この人、見かけによらずしつこいところがあるから、曖昧な言葉で濁すと、あとからそこを突っ込まれそうな気がする。だからここは単刀直入に、彼が知りたいことをズバッと答えてあげるのがいいと思った。

「普通、ビギナー向けのデートっていうと、映画を観たりテーマパークで遊んだり、それからショッピングとか。もしかすると、もつとすごいのがあるかも知れませんが、残念ながら私にはこれく

らいしか思いつきません」

これでもね、過去の経験を総動員して考えたんだよ。結局のところ、デートなんて相手が変わつてもその内容は似たり寄つたり。楽しい時間をすごせばそれでいいんだよ。

「なるほど、映画……テーマパーク」

え、何でわざわざ手帳を取り出してメモつてるの！ それくらい、頭の中に記憶してよ。別にたいした情報でもないんだから。

「あ、でも。今回は映画とかじゃつまらないかなつて。ふたりで黙つて同じ画面を観ているより、明るい場所で行ろんなおしゃべりをした方が楽しいかなと思いました」

ペンを走らせていた手をとめて、彼がこちらを振り向く。

「だって、久しぶりにお会いになるんでしょう？ きつと積もり積もつた話がたくさんあるはずですよ」

須藤さんの驚いた表情が、しばらくしてからふわりと和らぐ。

「ああ、……そうかも知れませんか」

一応は納得してくれたみたいだけど、どことなく他人事っぽく反応するところが気になった。だけど別に、そこは私が出つ込むところじゃないからスルーする。

「綺麗な風景と一緒に見たりするのも素敵ですね。ええと、たとえば夕焼けとか夜景とか。ああ、そうそう。この資料にお勧めスポットがいろいろ載つてますから、ぜひ参考にしてください！」

本当は会員さん限定の情報なんだよ、出血大サービスなんだから。

「へえ、今は便利なものがいろいろあるんですね」

「そうだよ、今はネットや雑誌でも簡単にいろいろな情報が手に入るんだから。流行を追いかけるばかりが能じゃないけど、楽しい時間を手に入れるために情報収集することは決して間違いない気がする。」

「……まあ、もちろん最後はふたりの気持ちが一番大切なわけだけど。」

「須藤さんの彼女さんって、どんな方なんですか?」

「親同士が決めた結婚相手なんて、お祖母ちゃんの時代の話みたい。でも実際、今の世の中でもそういう話は一部の階級では残ってるんだな。」

「一言で言えば、物静かで清楚な雰囲気の子ですね。髪は黒くて長く伸ばしていて、身長は——宮内さんよりも少し低いくらいでしょうか?」

「ふうん、そのまんま絵に描いたようなお嬢様なんだ。きっと家柄的にも須藤さんとはっちら合っただろうな。」

「彼女の家は父方の親戚で、僕たちは又従兄妹に当たります」

「お嬢様学校を幼稚園からエスカレーターで大学まで進み、卒業後は婚約者の帰国を待ちながら花嫁修業。何かすごすぎて、どんな感じか想像つかない。」

「昔からのお知り合いなら、話も合うでしょう。それなら何も心配することなんてないじゃないですか」

「そういうの、杞憂(きゆう)って言うんだよ。きつと蓋(ふた)を開ければ腰(こし)が抜けるくらいあつさりとすべてが上手(うまい)くいつちゃうんだから。」

「でも今まではずっと家族ぐるみの付き合いで、ふたりきりで出かけるのも今回が初めてになります。あの年代のお嬢さんの好みもまったくわかりませんし、途方に暮れてしまいます」

「えっ、そうなんですか!?!」

この事実にはさすがに驚いたけど、由緒正しいお家柄ならそういう感じになっちゃうのかな。だけでもう、ふたりとも大人なんだし。絶対に上手くいくと思う。

「無理に格好つけることなんてないですよ。須藤さんは、とても素敵な方ですから」

ああそう、これは初めての面会で緊張する会員さんにかける魔法の言葉。

コミュニケーションに失敗するのって、その原因のほとんどが「自信のなさ」と「自意識過剰」。このふたつは相反するもののように思えるけど、実は同じ感情の裏表。見栄を張る人ほど、実は劣等感でいっぱいなんだよね。

「そう……でしようか」

こんな風に、どこからどうみても完璧な人が必要以上に自分を卑下(ひげ)するのを見ると、さすがにイラつくわけだね。いいのいいの、ここは必殺営業スマイルで切り抜けよう。

「ええ、もちろん! 日曜日は、きつと素敵な一日になりますよ」

本当は他人のことより自分のことを頑張らなくちゃ、なんだけどなーっ。職場を離れてまで、仕事(しごと)と同じ台詞(せりふ)を言ってる自分がとても虚(むな)しい。

「以前、叔母さんが言っていました。運命の人と巡り会々と、その人とすこす楽しい時間や将来の自

分たちの姿がどんどん思いつくんですって。すごい時は、次々と頭の中で新しいシーンが閃くようになるとか。そうになったら、もうそこを目指して突っ走るしかないらしいです」

励ましついでに、ちょっと極端な話を。うん、これは私自身も未だに経験がないことだから自信たっぷり言うことはできないけど、実際叔母さんがお世話した会員さんの中にはその通りの現象が起こった方が何人もいるみたい。

「それは……またすごい話ですね」

ふふ、須藤さんって本気で驚いてる。そりやそうだよなー、今まで恋愛とは無縁の生活を送ってきた人だもの、想像するのも難しいのかも。

「ですよー、でもいろいろ考えていくと楽しいかも知れませんよ。たとえばTVで観光地やお祭りのシーンが流れてきたら、ふたりでそこにいたらどんな感じかなって想像したり……そうそう、今夜から須藤さんもそうやって練習してみるのはどうですか？」

もう時期はずれになっちゃったけど、花火大会とか夏祭りとか。そこにふたりで浴衣を着て出かけたらどんなかなって。綿菓子をふたりで半分こしたり、「たこ焼きにたこが入ってないよ」って言いながら頬張ったり……須藤さんって、意外と金魚すくいとかが上手だったりしてね――

「……あれ？」

自分の中に湧き上がってきた妄想に、慌てて待ったをかけていた。

なっ、何っ!? 今の、どうなってるの。どうして須藤さんと私がツーショットで夏祭りの屋台を巡っているのよ……! しかも私、金魚が入ったビニール袋を腕に下げた。水で満たされたそ

の中には、五匹くらい泳いでいた気がする。そのすべてが、あまりにリアルだった。

「どうかしました？」

ほらほら、へんてこな声を出したから、須藤さんにまで心配されちゃった。だけど今は彼の顔を見るのも無理。どんな表情していいのかわからないよ。

「あ、いいえ。何でもありません」

元はといえば、須藤さんが悪いんだよ。いきなり変な質問を私に投げかけてきたりして、だから頭の中が混乱しておかしなことになってるんだ。

「ここ、静かでとてもいい場所ですね」

私が赤くなったり青くなったりしている間に、彼はさっさと話題を変える。

「都会の真ん中にこんなところがあるなんて。ほら、ビルの間から海も見えますよ。今日は天気がいいから、とても綺麗な色ですね」

目を細めて遠くを見つめる眼差し、心地よい風に吹かれて揺れる前髪。彫りが深くて、いわゆるモデル顔。この人って、今まで女性たちの誘いをどうやって断ってきたのだろう。世の中には、私の想像を遙かに超えた不思議なことが多すぎるわ。

「本当だ、そんなこと少しも気づきませんでした」

音もない潮の香りもない、近くて遠い海。だけど白いレースのような波が寄せては返すのが見える。「私の田舎って、海のすぐ近くなんです。高校生までは、海岸沿いの道を通って登下校していたんですよ」

どうして急にそんな話が出てきたのかはわからない。いきなりたどえような懐かしさが押し寄せてきて、たまらない気持ちになつていた。

「へえ、それは気持ちよさそうですね」

セーラー服を着た高校生の私が、海岸通りの道を自転車をこいで進んでいく。左手に広がる海は朝の日差しにキラキラと輝いて、それだけでこれから始まる一日がとても素敵になる予感がした。

「東京に出たら、もつともつと素敵な毎日が待っていると思つてただけだな……」

地元から都内の大学に進学する女子なんて本当に少なくて、上京の折には賛否両論のいろいろな言葉をいただいた。たまにその中の否定的な意見が心にふつと蘇つてきたりする。

「宮内さんは、今の生活に満足していないんですか？」

う、待つてよ。急に問いかけても、すぐにはコメントが出せない。ああ、嫌だ。どうしてこんな話の流れになつちやつたんだろう。

「え、……ええ、そんなことはないですけど。このところ、いろいろあつたので」

夏の初めのリストラは大ショックだったよな。ようやく就職して二年ちよつと、仕事の内容も覚えたところだったのにいきなり投げ出されてしまつて。雀の涙ほどの退職金じゃ生活が成り立つはずもなく、落ち込む暇もないままに翌日からはハローワーク通いになった。

両親は「こつちに戻つてくればいい」つて言つてくれたけど、そうするには苦しい理由もあつてうん、この年齢になるとね、田舎では同級生もほとんど結婚したり子供が生まれたりしてる。そういう情報を逐一キャッチしている親たちが私に望むことを考えたら、自然と足も遠のくつてわけ。

だけど、あつという間に二ヶ月。いよいよあとがなくなつて、私は覚悟を決めかけた。

あの時、母親から連絡を受けた叔母さんが私に電話をくれなかつたら、いったいどうなつていたかわからない。

「まあ、収まるころには収まつたし。これから頑張るしかないですよね！」

今日の私は花柄のキャミワンピ。着心地がよくてスタイルもよく見えるから、この頃はこんなファッションばかりになつていて。そんな中でも、とくにお気に入りの一枚を今日のためにチョイスしたつて……どうしてなんだろうな。

髪だつて、気合いを入れて巻いてみた。先日の会員さんほどグルグルじゃないけど、見る人が見れば「頑張つたな」つてわかる程度の仕上がりになつてるよ。

「そうですね、お互いに頑張りましょう」

何か、こつちが逆に励まされちゃつてるよ。そして彼は私に右手を差し出してくる。

「宮内さんの明るい笑顔を見ると、僕もとても元気になれます」

しばらくは目の前の彼の右手をぼんやりと眺めていた。もしかして握手を求められているのかなつて気づいたのは、ずいぶん時間が経つてから。

「こちらこそ、須藤さんの幸運をお祈りしています」

さすがアメリカ帰りのビジネスマン、挨拶の基本は固い握手なんだ。そんな風に感心しつつ、おぼろげと右手を伸ばす。彼は待つてましたとばかりに、ギュッと握り返してくれた。

「……うわ……！」

だけど次の瞬間、お互いが弾かれるようにぱつと手を離していた。すぐには何が起こったのかわからなくて呆然ぼうぜんとしてしまう。そしてそれは目の前の彼も同じだったみたい。

「すっ、すみません！」

「……いえ、こちらこそ！」

端から見たら、何だコイツらって状況だね。でも、その時の私たちは必死だったんだ。

——だって、ビビッと来たよ。マジで身体中に電流が走ったかと思っちゃった。

もしかして静電気？ でもまだ秋の途中だし、それほど空気が乾燥しているわけでもないと思うのに。

「そ、そろそろ行きましょうか」

「そうですね」

どちらからともなく立ち上がって、その場を取り繕つくろうための言葉を発する。でも実はまだ、心臓がバクバクいつてる。これっていつたい、どうなっちゃってるの？

「どうでしょう、少し時間は早いですがこれからお食事でも」

え？ と振り向いた私の表情はきつと固まっていたと思う。身体が一瞬震えたから、もしかして怯おびえているように見えてしまったかも。

「いえ、今日はこれで帰ります。部屋の片付けとか、たくさん溜たまっていますし」

とにかく必死で断ったつもり。

……そうよ、そう。きつと私、いきなりいろんなことを考えすぎて、頭がショートしかけている

んだ。とにかくひとりに戻って、心を落ち着けなくちゃ。

「そうですね。では今、車が来ますので、お部屋まで送らせて下さい」

その言葉にも首を横に振る。

うる髪を引かれる想いつて、たぶんこんな感じだろうな。でも自分の選択は間違つてなかったと思う。この人とこれ以上一緒にいちゃ駄目だって、私の心が警告を発している。

「いいです、ひとりで帰れますから」

もういいじゃない、話は済んだんだし。

どっちにせよ、日曜日のデートが上手くいけば、私なんてお役ご免でしょう？ これ以上、仲良くする必要もないと思うんだ。

「え、大量のキャンセルですか？」

翌日、出社した私を待っていたのは、寝耳に水の出来事だった。

「そうなのーっ、突然のことに私もびっくりよ。この仕事を長いことやってるけど、さすがにこんなのは初めてだわ。いつたい、どこからどうやって手をつけたらいいのやら、それもまったくわからなくて……」